愛知教育大学附属高等学校研究紀要第 51 号
pp.71～80（March, 2024）

「教職の魅力」と初めての教育実習

―コミュニケーションか教材か―

（「教育実習」の教育学的考察事始その２）

校長（地歴公民科）　西牟田哲哉

教育実習の基礎基本を押さえつつ、「教職の魅力」に少しでも近づく方法を実践的に考察してみた。前回の紀要において、「教育実習」についての教育学的考察を拙稿で試みた。今回はその続編である。昨今流行のコンピテンシーベースに警鐘を鳴らす点は、前稿と同様である。本稿では教材開発の意義や机間指導のあり方に焦点を当ててみた。終章で“教え子”の誕生をめぐる物語に触れ、新たなる教職論・教師論の手がかりとした。

＜キーワード＞　教職の魅力　教育実習　コンピテンシー　教材　机間指導　教え子　教師論

1. はじめに―「教職の魅力」とは？

教員のなり手が減っている。教育大学の中にいると気づきが遅れることがあるが、教育実習生の数について、愛知県内の県立高校でここ数年激減が話題になった。こうした状況から、当方には大学生や教育実習生にぜひ「教職の魅力」を伝えてほしいとの要望が寄せられる。だが、「教職の魅力」とは何か？それを一言で表現するのは、私には難しい。ほかの方は、大学の「教職論」「教師論」などで、どう語っているのだろうか？

自らが教職を選んだ喜びを、最近も多くの場面で実感した。例えば昨年の５月、初めての担任だった子たちが 50 歳になって、久しぶりにクラス会をした。下町の都立の伝統校（高校）で、１・２年クラス替えがない連続の担任。いろいろな意味で濃密な人間関係だった。彼ら彼女らは、私のことを、いつまでも「当時の 20 歳代のまま」と思って「先生、先生」と慕ってくれる。嬉しい限りだ。振り返ってみると、たいした授業をやったわけではない。ただただひたすら、彼ら彼女らと一緒に毎日「伴走した」だけだ。それでも「先生、先生」と慕ってくれる。そんな職業、他にあるだろうか？研究者や新聞記者、法曹界、政治家などを目指したら、同じような経験は私にできたであろうか？

あるいはまた、今の職場で高校３年生が突然校長室をノックし、「校長先生の人権講話に刺激された。自分の考えを言いたい。校長先生と議論したい」と言う。18 歳の男子高校生が、真顔で 64 歳になる私と「議論したい」と言ってくれるのだ。お孫さんに恵まれた方は別として、一般には最近稀有の情景ではなかろうか？これも嬉しいし、楽しい。50 分余り彼と校長室で語り合った。若い方と議論を交わすのは、いいものである。

はたまた、附属高校では、教職大学院の方の研究のお手伝いをすることがある。高度なテーマが多い。高校生にわかるだろうか？研究と実践を結び付けるのは、思いのほか難しい。研究とは、苦しいものなのだ。経験した者にしかわからない「産みの苦しみ」がある。お手伝いする者は、傍らでただ待つしかない。長い沈黙や議論の末、暗闇のように思えたその向こう側に、一条の光が見えてくることがある。これも嬉しい。探究の現場に臨床して、言わんとすることを受け止める。あとはただ一緒に待つ。やれ

るのはそれだけ。それでも光が見えてくると、自分のことのように嬉しい。この研究の光から、何十何百の新しい実践が生まれるかも知れないのだ。ほかの職業の人にはわからないかもしれないが、実に意義あることだと私は思う。教師冥利に尽きると感じる。

2. 教育実習生に望むこと

(1) 校長と教育大学生の間の「深くて暗い川」

教育実習生に接してきて、際立った印象を持つのは次のことである。どんな不安があるか、授業の準備は大丈夫か、と聞くと、多くの学生が「生徒とうまくコミュニケーションがとれるか、が心配だ」と言った答え方をする点である。校長という立場と、教育大学の学生で初めての高校での実習という立場の違いもあるのだろう。しかし、かなりの落差である。私はたいてい少し苦笑いをしながら、こう答える。「全く知らない高校生の中に、いきなり入っていくのは、誰だって難しいよ。最初からコミュニケーションなんて難しいさ。まずは、一生懸命に自分の授業の準備をすることだよ。授業や掃除等を一緒にやりながら、子どもたちをよく見ることが大切だよ。よく見てれば、自然に“その先の言葉”が出てくるさ」と。

励ましのつもりで言うのだが、反応はたいてい今一歩である。実感がないのか、ぽかんとしている向きもある。特に私が気になるのは、「授業の準備」という言葉に反応が弱い点だ。「授業の準備」って、なんだろう？わかりやすく、効率よく教えればいいんでしょ。こんな心理なのだろうか。あるいは、まだ生徒に会っていないから、準備は無理と思っているのかもしれない。よくわからないが、両者には「深くて暗い川」がよどんでいそうである。

(2)「わからないオーラ状態」の苦境

実習が３日ほど経つと、実習生たちの顔色が変わってくる。決しておもわしくはない。「初めて授業をやった。生徒たちが何の反応もしてくれない。尋ねても、応えてくれない。「わからない」オーラが出ている。どーしよ・・・」と言った表情だ。

次にあげる写真は、そんな体験をした一人、Ｓ・Ｋさん（**注１**）。写真は本校での実習中（R４年度）の教壇での姿だ。最初は戸惑いもあったが、実習の２週間で自らを大きく成長させた。最後の研究授業では、見事にクラス全体と息の合ったコミュニケーションのある、実り豊かな実践を見せてくれた。写真（VTR からの画像）は、その授業の最初 10 分ぐらい。「わからない」オーラから、言わば、お互いが脱した瞬間だ。生徒が置いてけぼりにならない。参加者全員の視線が１点に集まっている。流れを決めた瞬間だ。視線がそれを物語っている。

(3) 教員養成の契機としての教育実習

「わからないオーラ状態」の苦境から、どんな努力とプロセスでＳ・Ｋさんは成長していったのか。私たち高校教員や大学教員は、どのタイミングで何を指導するのがよいのか。本小論では、教育実習を教

員養成の重要な契機と捉え、その実践的な課題を具体的に紹介しつつ、「教職の魅力」に近づけるような教育実習のあり方を（本誌前号の拙稿続編として）考察してみようと思う（**注２**）。

Ｓ・Ｋさんの成長していく様子を見て、私は思うようになった。教育実習では、学生たちのこの状況（「わからないオーラ状態」の苦境）を、むしろ恐れず積極的に待つことが、非常に大切なのではないか、と。彼ら彼女らは、初めて「１時間を仕切る側」「そのクラス・学習集団の責任を負わされる側」のつらさを体験しているのだろう。「座って、ただ教師への不満や批判を自由に口にするだけ」の気ままな学生の身から、責任を取らされる大人の世界に入る劇的な転換点にいるのだ。「深くてつらい川」を自力で渡りだしている。むしろ、最初うまく行き過ぎて、なんのつらさも感じない様子の学生の方が、後々心配なのかもしれない。

3. 教育実習の前半で身につけてほしいこと

(1) 授業準備の基礎基本～「教育内容」を絞り込む

今年度に入り、私は「わからないオーラ体験状態」になった学生に、ちょっと酷だが、よし、このタイミングだ、と心を“鬼”にして、こう言ってみた。「１時間生徒をあなたは集めていると考えてください。あなたが集めているのです。集めておいて、１時間授業をやって、結局、あなたは、何を彼ら彼女らに伝えたかったのですか？」と。この質問に一言でこたえられるようになりましょう、と。できるだけ、簡潔に。一言で。

「ＡはＢであることを教えたい」と、命題の形で、一言でその授業の最大の目的をまとめておく。教育学の専門用語で「教育内容」の絞り込みという（**注３**）。実は、高度な抽象化能力がいる。（少し横道になるが、この私の言説に違和感を表明した学生の事を、前回の拙稿で紹介した。彼のことも後述する。）

私は 21 歳の時にはもうこれを習っていた。授業の準備の第一段階である。教育大学の学生なのに、知らないのですか？とあえて嫌味を言うこともある。これは、教育大学カリキュラムへの私なりの批判でもある。そして前稿で述べたように、最近の「コンピテンシーベース」への警鐘でもある。

以下は、本紀要前回の拙稿の要約である。本校でどのように「授業準備の基礎基本」を教育実習生に私が伝えているかがわかるので、重複になるが、その指導内容を紹介する。参考にされたい。

(2) 前回の要約～４つのレベルを「次元＝Dimension」として分ける

教育学・教育方法学の基礎基本的な４つの分析枠組みを使い、新学習指導要領時代の新しい教育実習のあり方を考察した。「４つの分析枠組み」とは以下である。

① 「教育内容」レベル　→　その１時間で何をこそ教えようとしているか？
② 「教材」レベル　→　①をわかりやすく伝えるための題材・具体例・エピソード・例題等
③ 「教授行為」レベル　→　「発問」「ヒント」「選択肢」「資料の提示」「パワーポイント」「説明の言葉」など、教師の教育方法の実際
④ 「学習者」レベル　→　子ども（児童・生徒）が頭の中で実際に学んでいる内実の認知構造

近年の教育論議で「コンピテンシーベース」と称して、①の「内容（コンテンツ）」を著しく軽視し、逆に初心者にも④の「学び」研究を要望する傾向を、無理があるのではと危惧し、特に「教育実習」では新時代であっても①②③の基礎基本をおろそかにしてはならないことを強く主張した。そのうえで、これからの新しい教育実習のあり方を提案したものである。

(3) 基礎がためと安定感

右は教職大学院生のK・Rさん（注４）の授業風景である。一斉授業であるが、どの子も集中して聞いている。彼女は学部４年の時も、本校で実習をしている。大変まじめで才能豊か。私の助言にも常に吸収しようとする意欲がある。その効果は成果として表れていて、授業はわかりやすく、説明も的確である。安定感があるのは、上の①「教育内容」の絞り込みが準備としてよくできているからである。②の「教材」、K・Rさんは国語（本校非常勤兼務）であり、通常国語では基本的な教材は教科書から離れられない。ここでは、教科書掲載の短編小説「神様」（川上弘美）を主教材として扱う文学の授業になっている。主教材に合わせて、関連する体験例などを、補助的な教材群として、うまく用意している。その点、②も十分である。③「教授行為」については、PPTを使い、同時に同様のワークシートを配り、整然と授業は進行している。これで十分授業は、成立しているといえるだろう。

校長である私から言わせれば、（専任も含め）初心者・初任者はこれだけできれば十分なのである。実習生も当然これでいい。だが、最近はやりの授業分析や教育方法学では、新学習指導要領やA・L論を意識して、「学びのあり方」をうんぬんすることがしばしばある。生徒の発言の詳細な分析、感想や小論文を課せば、学びのあり方も研究対象に加えられよう。K・Rさんの授業実践も、きっと効果的な結果が出るだろう。きちんと授業を最初から最後まで見ていれば、それは自ずとわかる。だが、日常、私はそこまでは要求しない。毎回やるのは大変だし、前稿で述べ、後述もするように「学びのあり方」の研究は、近年の論者ら言うほど実は簡単ではないからだ。

この授業でも、大半がよく理解している一方、最初の授業中１人の男子生徒が「小説の題名なんて、みんなテキトーに決めてるんでしょ」と屈託なく笑って、周りを驚かしていた。「題目」の大切さを説いた授業だったからだ。K・R先生は絶句していた。でも、授業はこんなもんである。こちらの意図通りには、④「学習者の頭の内実」は動いてはいないのだ。それが現実なのに、40人の全体像を、毎回正確に、科学的学問的に肉薄するのは、実は大変難しい。初学の実習生にはとても無理だと私は思っている。ただ、一番最近の実習（R５年度５～６月）において学部４年生でこれに挑戦し、かなり「いい線」いっている実践に出会った。５章では、それを紹介する。

その前に、ややネガティブになるが、①②③をおろそかにしたまま、④を実習生が挑戦しようとする危険性について、いくつか実話に基づく報告をしておきたい。

4. コンピテンシー信望者の末路

手始めに、最近のコンピテンシーベースの教育方法学を学び、その通り教育実習等で実践しようとした者達の体験談を可能な限り紹介しよう。彼らが現場でどんな仕打ちにあっているか。象牙の塔で、相変わらずユートピアを語っている教育学研究者は、現実に耳を傾け、ぜひ目覚めてもらいたい。

(1) 教え子の１人N・Kさんとのやり取りから

まず、大学学部と大学院で私が教えたことのある社会科教育専攻のN・K（注５）さんとのやり取りを紹介する。彼の文章に出てくる「A君」は、N・Kさんの同級生である。彼は、前回の拙稿で紹介し

た人物である。「なぜ教えなければならないか。学ばせるではないか。」と言った大学４年生（当時）である。

「A 君でしょうか。彼も彼で、かなり思い込みに突っ走ってしまう傾向があります。今年度、初任の彼に、現場の感想等を聞きましたが、かなり心を亡くして、子どもを叱ってしまっているようです。私はこの立場で十分な現場経験がありませんが、コンピテンシーを大切にすると言った者の末路がこれかと少し失望した記憶があります。

私も全く人のことを言えたためしがありませんが、昨年度末の失敗、また、大学院で学んだ J.デューイの、単なる経験主義ではなく、コンテンツもまた重要視し、それを発達段階、子どもの関心ごとに調整しようとする姿から、昨年の自分への批判を確かにしました。「探究」とは、単に「課題設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」のスパイラルを実現すればいいものではないという点も、同様に学びました。」

(2) 昨年度実習に来た教え子Ｔ・Ｈさん（注６）の手紙から

同様の報告は、ほかにも私の耳に次々に入ってくる。教育実習でアクティブ・ラーニングをやろうとして、危うく学級崩壊を招きそうになったという報告もあった。以下に紹介するのは、前回の拙稿で私がやや手厳しい批判をした授業を行った教え子の T・H さんの手紙（メール・掲載許可の返事）である。

「・・。文章の方でも取り上げていただき、中身を拝読して正直一部うっとなりましたがとても勉強になりました。今思い返すと２つ作った授業両方とも「生徒たちから意見を引き出せるような問いをどう作ろうか」というところに意識を振り向けすぎて、結果として①の教育内容はそれに引っ張られた形で明確にならず、授業時間が延びるとなったときの対応がうまくできず、②の教材づくりでは材料集めにかなり苦戦した(そのうえそれを支える知識面も欠けていた)うえにプリント内容が途中で揺らぎが生まれ、③は意識できていた…のかもしれませんが結果としてはうまくはいかず、④は先生方からも「これはできる子向けの授業だね」とご指摘をいただいたり、スライドに地図を載せなかったので地理的なイメージがつきにくいのではとご指摘をいただいたりしました。それこそ内容面でもっと絞り込んだ授業構成にしていくべきだったのではというご指摘もいただいたり、A 山先生にも研究授業の案をご確認いただく中で「これでは大学生の模擬授業で生の生徒相手にやる授業ではない」とご指摘をいただいたりしていたので、先生が文章で書かれていた通りだったんだなと改めて痛感しました。

あの後大学に帰って勉強をしていますが、思い返せばテクニック（③の教育方法）の方にさらに足を進めたなと感じますし、周りの環境も教育内容というよりは③の教育方法の方に目が向いている人が圧倒的に多いなと感じます。・・どういう方法を用いて歴史学習をしていくか、見方・考え方を養っていくかというほうに重きがいっているような気がして、周りの学生でも授業うまいなと自分が感じる学生ほど(特に同学年の学生)は、どうそこで得たテクニックを使うかというところにかなり目を向けているテクニシャンだなと感じます。特に①はともかくといった形で。・・「アクティブラーニング」という言葉が独り歩きしている・・。テクニシャンもどきになり結局のところ自分自身が全く変わっていないなと感じました。 私自身が大学を選ぶときに自分の経験もあって「文学部とか行って頭でっかちになって分かる人にしかわからない授業しかできなくなるより、ちゃんとどう教えるかというところを身に着けたうえで先生になりたい」という思いもあって教育大学(学部)を選んでいましたが、今の自分がその時目指していた姿になれているのかなとも少し感じました。・・」

（傍点は、いずれも西牟田による）

5. 基礎基本の次は「机間指導」の向上へ

(1) 教育実習での机間指導

右の写真は、今年度（R５年度）の５月～６月に行われた実習での一場面である。いわゆる机間指導の最中に生徒と談笑する、素晴らしい笑顔のあふれる場面をとらえている。研究授業でこのような活気あふれる授業ができることは、めったにない。

この学生（当時）（H・T さん国語（**注７**）は、大学２年生の時私が教育法（社会科）を教えた学生である。①～④の基本をよく理解し、①②について、実習を始める前にすべての授業案を作成し、私に見せた。ここまでやれる学生に初めて出会った。このような努力の結果が、この笑顔に成果として結びついている。

ただ、授業を（上記の場面の前後を中心に）VTR で注意深く見ているとわかるのだが、この班の机間まで、授業者（H・T さん）がやって来るまでに、ずっとこの班の議論をリードしていたのは、実は、H・T さんが話しかけている左の女子生徒ではない。右の女子生徒である。近くにいた私でも、議論の中身までは把握できない。(生徒の思考に肉薄する授業研究は難しいのだ)。想像に過ぎないが、右女子生徒は課題に対し思うところがあり、一生懸命その思いのたけをメンバーの仲間にしゃべっていた。ほかの場所の机間を回っていた授業者に、おそらくそれは見えていない。たまたまここに来た瞬間に、今までずっと黙っていた左女子生徒が、発言。それが、短くて、かつ、的確、つまり端的だった（私の想像)。瞬間的に授業者は「うん、それ！いいね！」(そう聞こえたが、半分想像）とコメントした。その瞬間の映像が上記なのである。この机間に授業者がいたのは、この部分だけだと、１・２秒である。

(2) まずは「正解」のある問いを

明治の時代から「机間巡視」なる教育用語はあった。が、「机間指導」のあり方は、最近その目的を変え年々重要になってきている。私は今、「机間指導」のあり方こそが２週間実習後半のポイントでは、と思うくらいになった。どの研究授業を見ても、そこが検討会の“山”になりそうだからだ。この点の、こちら側（高校教師・大学教員側）の指導方針を紹介しておく。（もちろん私の考えである）。

私は実習生に言う。「ただ漫然と机間を回ってはいけません。同じような“つまずき”が複数ないか？まず観察すること」と。“つまずき”がなければ、授業をやる必要はない。“つまずき”の発見は、教師の大事な仕事である。そして、次に大事なのは、その“つまずき”が、その子だけの問題なのか、ほかにもありうる複数生徒に共通の問題なのか。この判断である。前者であれば、個別の指導が必要である。しかし、もし、後者であれば、授業全体をストップする指導が、すぐに選択されるべきである。理想的なのは、全体の３分の１から３分の２ぐらいがつまずき、苦戦している状況。それを意図的に作ること。作為し、意図的に授業をストップするスキルである。プロの教師は、たいていこれをやっている。このストップと説明の追加で、“つまずき”のある３分の１から３分の２の学びが、ぐっと深まるのである。「あっ、やっとわかった。こういう考え方しかしなかったから、私、いつもどんずまっちゃうんだ。ナットク。別の角度に眼を向けるのね。なるほどー」となるわけだ。自分でやってみて、“つまずいた”からこそ、より一層追加の説明に深く納得するのだとも、言えよう。さて、実際はどうだったか？授業検討会の話題にすればいい。

さて、次に私は実習生に問う。「以上の効果的な「机間指導」が短い授業時間内にできるためには、どんな準備が教師には必要だと思いますか？」と。

必要なのは、あらかじめ子どもたちの考えがち、思考しがちなパターン、誤りがちなパターンをモデル化して、複数押さえておくことである。そして、何に注意すれば「より深く」「より正確に」答えに近づくか。どういう指導が追加で必要か。用意しておくことである。よくいわれる「思考のあり方の評価規準をルーブリックでつくる」といったタスクは、まさにこの準備を指すものと私は捉えている。（**注８**）

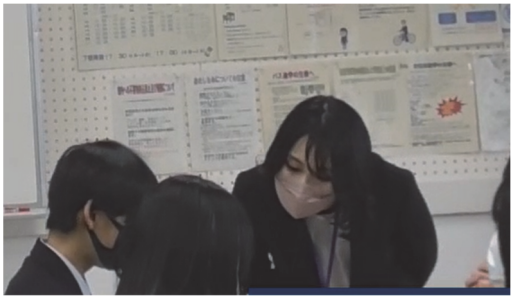
実習生でありながら、これが出来ていたから、H・T さんの授業では、早いスピードで効果的な机間指導が成立したのであろう。そう、私は考える。これこそ、まさに「学びのあり方」の研究である。読者諸氏に注目を促したいのは、この場合、「一定の正解」が教師の頭の中にあるという点である。机間を回る目的は、「正解」と「それ以外」を探し、分別する作業となる。だから、早くできる。そして、「話し合い」の授業でも、まずはこうした「正解のある」問題で埋め尽くされるべき、と私は考えている。読者諸氏には異論があるであろう。が、しかし、そうでないと、得てして「みんな正解」という名の下、知的な深化の見られない、知的にはむしろ怠惰な印象を受ける授業になってしまうと私は思うのである。残念ながら、紙面の限りがあり、ここでこれ以上この議論を詳述する余裕がない。

(3)「正解のない」授業の机間指導

H・T さんの授業を紹介しながら、実習生でも①～③を大学できちんとやれれば、④の学習者まで踏みこむことができると述べた。ただ、④まで踏み込んで準備する場合も、やはり高校の教育実習では、飽くまでも「正解のある」授業を目指してほしいというのが、現在の私の考えだ。基礎がためができてない状態で高いレベルに挑戦すれば、４章で示したようにきっと痛い目に合う。「教職の魅力」どころではない。下手をすると教師になるのをやめたくなるのである。

本小論として強調したい重要な論点は、次の２点である。一部繰り返しになるが、それを付記して、新しい章に移りたい。

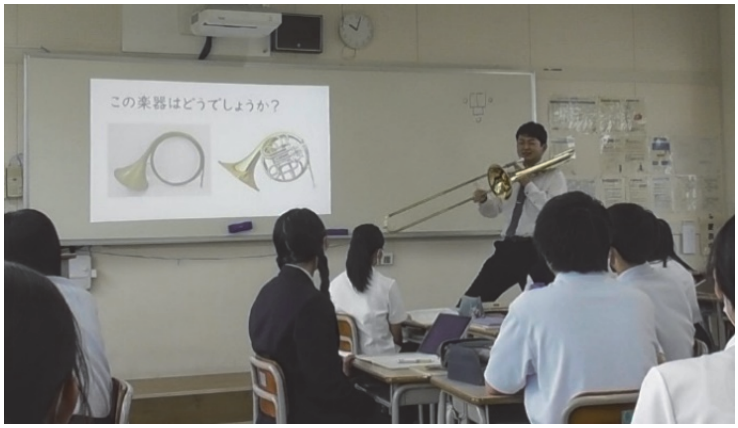
１つ目は、「教職の魅力」につながる教育実習としては、④やそれを促す③を直情的に求めるのではなく、遠回りのようでもそれに結びつく①と②、特に②の「教材」の開発が決定的に重要だという点である。次の６章で詳細に扱う。



２つ目は、④については挑戦するにしても、前述のように、実習生は飽くまでも「正解のある問い」がいい。が、しかし、いくつかの条件が整えば、若くても「正解のない問い」に挑戦し、中身のある授業が成立することが見受けられるということである。右の写真の授業（教職大学院のK・Rさんの授業）は、その貴重な場面を捉えている。もちろん、私の理解であり、私の想像・解釈である。（詳細な検討は別稿にゆだねる（**注９**））そして、こうした授業は、通常の一斉授業から「探究授業」さらに「探究活動」へと、発展させていく可能性を秘めている。だから、これからの学校にとって必須の研究課題である。そうではあるが、基礎がためが大事な初学の教育実習生に、安易に求めてはならない。これが私の主張である。ただ、「基礎・基本」はどの分野の世界でもえてして地味で退屈であり、なかなか「教職の魅力」に結びつくような実感は持てないものである。そこで、どうするのがいいか。次章で私の考えを述べる。

6. 教材の開発がなぜ「教職の魅力」に結びつくか？

(1) 金管楽器の教材化と歴史の授業



右の写真は、やはり今年度の本校の教育実習の授業場面である。授業者であるＯ・Ｒさん（**注 10**）は、愛教大社会科史学教室の４年生。やはり大学２年生の時、私の教科教育法の講義を受けている。この研究授業の初っ端で「皆さん、いいですか？今日は、もちろん「歴史の授業」です。「市民革命と産業革命」の授業です」と言いつつ、写真のように突然トロンボーンを吹き出した。ちょっと古めの金管楽器に比べて、上下（または左右）に動く器具が新しい楽器には付いている。そこに注目させる。この器具の名前は？と問う。吹奏楽に詳しい生徒が「ピストン」と答える。その流れで「ピストンの構造のある機械の発明」そして「産業革命」の話へとつなげていった。授業後半はフランス革命の時期の挿絵を用い、様々な金管楽器が描かれていることに注目させ、その理由を考えさせた。写真からも想像されるように、金管楽器の教材が功を奏している。生徒たちが興味津々のうちに、気が付くといつの間にか、歴史の授業が活気をもって展開されていった。Ｏ・Ｒさんの得意分野である吹奏楽の楽器を「教材」として利用し、イギリス産業革命やフランス革命につなげていく歴史の授業として、成功しているといえるだろう。「教育内容」との呼応にあと一歩課題があった。が、しかし、ほかの誰でもない「Ｏ・Ｒ先生の授業」がつくられている点に注目したい。教師としての主体性は、こうして育っていくのではないか。私はそう考える（**注 11**）。だから、「教材」の独自開発は、学習者とのコミュニケーションの面で、一見遠回りのようでも、準備として大切なのだ。「教職の魅力」につながる教育実習にするためには、“基礎がため”と両立する②の「教材の開発」が大事なのだと私は提案したいと思う。

次の例は、私自身開発真っ最中の教材である。写真は、令和５年８月６日、立教大学での全国大会の場面である（**注 12**）。歴史教育において、どんな教員養成が必要か、を議論するシンポジウムである。オリジナルな教材の開発が、若い先生の主体性を育てる。「教職の魅力」を味わうきっかけとなる。「教材」は教科書や史資料に限らず、生徒や学生にとって身近かな、生活の中にもころがっている。例えばマンホールのようなものからも、教材にして歴史の授業を始められる。こう主張した。愛教大生のよく使う知立市のバス停近くには「かきつばた」の色に染まったマンホールや「からころもきつつなれにしつましあれば・・」と『伊勢物語』在原業平の歌の彫られたマンホールがある（**注 13**）。「鮮やかに彩られた馬の絵」のマンホールもある。

知立市には平安の昔から「八橋」と呼ばれる町名が残っている。江戸には馬の市が開かれた。そこに自生するカキツバタの花を、今も市民は愛している。ではその「八橋」の橋は、どこにあるんだろう？どの川のことだろう？平安の書物と江戸後期の書物で、食い違いがあるのでは？なんで、江戸時代、知立で馬が多かったのか？もしかして、京都のお菓子の「八ツ橋」と知立の「八橋町」、関係あるんだろうか？いくつか謎解きをしながら、楽しく歴史が学べる。そんな「教材」の開発プロセスを紹介した研究

発表である。教育実習において、基礎がためを押さえつつ、かつ、教師の主体性を育て、「教職の魅力」につなげるには、自らのオリジナルな「教材」開発の経験が効果的なことを、ここでも強調した。

7. 終わりに一再び「教職の魅力」とは？

今年の正月も、たくさんの「教え子」から、心暖まる年賀状をもらった。教職を選び、年賀状のやり取りをする人の数は倍増した。ありがたいことだ。また、久しぶりに地元のローカル電車に乗ると、「西高の前の校長先生ですよね？」と声をかけてくれる卒業生に出会う。「終業式の鬼の話が面白かった。話の続きが聞きたい」と、隣にちょこんと座るのである。出会ったのは、もう５年以上前の子である。こんなこと、ほかの職業で考えられるだろうか？　その日１日、私は卒業生の彼女のおかげで、とても暖かい気持ちで過ごすことができた。そして、世間の教師たちもまた、似たり寄ったり、同じように一般では考えられないような恵まれた経験をしていると思うのである。

私は、つくづく思う。子どもたちは皆、自分の出会った先生は、「いい先生」なのだ、と思いたいに違いないと。そして、いつまでも「いい先生」であってほしいと願っているのだ。 だからこそ、と、私は大きな声で言いたい。私たち教師は、その信頼や期待・願いに応えるような仕事をしなくてはならないのだ、と。その「仕事」とは何か？それを今回も「教育実習」に焦点を当てて、考察してみた。子どもたちの信頼や期待を裏切るような、中身のない授業やお話を、たとえ１回でもするまい、と誓うのである。

本小論を閉じるにあたり、ほんの少し横道にそれるが、拙稿執筆中にふと新たに感じたことを付記しておきたい。上の文章で私は、教え子をあえて「教え子」と記した。たまたま出会った人たちである。出会った人たちを簡単に、教え子と呼ぶのには、私は長い間抵抗があった。お金をもらって教える仕事をしているのだから、えらそうに、教え子などと呼び捨てにするような立場にはない。一般社会なら、「お客さん」たる存在なのだ。申し訳ない。そんな心理的な抵抗感である。

ただ、その一方、ふとした機会に、「まぎれもなく、この子は、私の教え子だ」と感じる瞬間がある。いわば、“教え子”の誕生だ。外からでなく、（うまく言えないが）内側から生まれてくるのだ。この瞬間にこそ、私がまだ気づいていない「教職の魅力」そのものが、隠されているのではないか。本稿に掲げてきた写真やエピソードを振り返りつつ、誕生の瞬間を１つ１つ想い起こすと、魅力を限なく際限なく物語っているように思われるのだ。

授業の仕事を飽くまでも中心軸としつつ、その周辺のマージナルな部分から、その存在は、ふいっと顔をのぞかせてくれることが多い。中心軸からは、少しずれた場面から。そんな気がする。“教え子”は、関係性で言うと内側からだけど、「仕事」を軸に言うと意外にも周辺部から、やってくる。１つ１つ、ある種の物語が隠されている。そんな風に思われるのだ。何が理由かわからないが、もしかして、「この魅力ある瞬間」の出現は、最近少しずつ、減っているのかもしれぬ。その分この「教育」の世界も、徐々に「お客さん」が蔓延しつつある。もしそうであるならば、それは悲しいことではないか。絶滅の危機‥。手遅れにならないうちに、正体がつかめるよう、急がなければなるまい。

来年の今頃は、そんな角度から、改めて「教職の魅力」について、最終稿が書けるよう、励んでゆきたい。

＜注と参考文献＞

（注１）文中のＳ・Ｋさん＝椙山薫さん　愛教大国語４年（Ｒ４年６月当時）大学２年生の時筆者の初等社会科教育法受講。現在、名古屋市立工芸高等学校教諭（国語）

（注２）愛知教育大学附属高等学校編『研究紀要第 50 号』2023 年３月ｐ93 参照

（注３）柴田義松『教科教育論』第一法規 1981 年、藤岡信勝『授業づくりの発想』日本書籍 1989 年・『教材づくりの発想』同左 1991 年・『社会認識教育論』同左 1991 年、宇佐美寛『思考指導の論理』明治図書 1973 年・『授業の理論をどう作るか』同左 1983 年、『教育において「思考」とは何か』同左 1987 年、西牟田哲哉『私家版　歴史教育　論稿集』自費出版 2019 年など

（注４）文中のＫ・Ｒさん＝近藤れいらさん　愛教大教職大学院Ｍ２国語教育（当時）　大学４年生の時本校で教育実習　Ｍ１秋～Ｍ２冬の約１年数ヶ月　本校を研究フィールドに。本校非常勤講師も兼務。現代文学論特に「小川洋子論」を研究。この４月から、愛知淑徳中学・高等学校常勤講師（国語）

（注５）（注６）

文中のＮ・Ｋさん、Ｔ・Ｈさんについては、個人情報保護のためここではこのイニシャルだけで留めさせていただく。

（注７）文中のＨ・Ｔさん＝堀輝波さん　愛教大国語４年（当時）大学２年生の時筆者の初等社会科教育法受講、この４月から愛知県の県立高等学校教諭（国語）

（注８）参考文献として、さしあたり、佐伯胖『イメージ化による知識と学習』東洋出版 1987 年、石井英真『コンピテンシー・ベースの教育改革の課題と展望』日本労働研究雑誌 2022 年の２つをあげておく。両者には 35 年間の開きがあるが、浅学の筆者には佐伯氏の玉稿を超える研究を挙げることができない。学びのあり方の研究は、近年の若手研究者が言うほど簡単ではない。

（注９）全国附属高等学校連盟研究大会において、筆者はこのテーマに付き研究発表済み。2023 年 10 月 27 日岐阜市内にて。題目は「探究力を伸ばす教員養成に貢献する「附高ゼミ」の挑戦」

（注 10）文中のＯ・Ｒさん＝岡田陸さん　愛教大社会科４年（当時）大学２年生の時筆者の社会科教育法、４年後期（実習終了後）地歴科教育法を受講。

（注 11）2023 年８月６日、立教大学での研究大会（詳しくは注 12）で、このことを中心に発表した。近日中に別稿執筆予定なので、それを待たれたい。

（注 12）高大連携歴史教育研究会第９回全国大会の第５部会（歴史教育の教員養成部会）でパネラーとして発表。2023 年８月６日立教大学にて。

（注 13）知立市のマンホールの教材化については、杉浦美香氏（本県の県立高校教諭）からヒントと示唆を得た。知立市内の小学校では、以前からいわゆる「総合学習」で扱うことがあったらしい。また、知立・八橋の地名と『伊勢物語』の成立史については、愛教大の田口尚幸教授（国文学）から多くの資料をいただき、助言を受けた。両氏にこの場を借りて、お礼を申し上げる。